

## 第12期県民生活審議会 第1回県民生活部会 議事要旨

1. 日時 平成31年2月18日(月)13:30~15:30
2. 場所 ひょうご女性交流館5階501会議室
3. 出席者 委員：鳥越会長、小西部会長、岩木委員、北野委員、高岸委員、田端委員、千葉委員、野崎委員、服部委員、飛田委員、宮定委員、盛委員、山口委員  
ゲストスピーカー：涼風町自治会(芦屋市) 大手前大学 谷村要准教授  
県側：松森女性生活部長、橋本県民生活局長、久戸瀬県民生活課長、松岡県民生活課副課長、西谷県民生活課班長、幹事課室ほか関係職員
4. 議事
  - (1) 「参画と協働」に関する審議の進め方について
  - (2) ゲストスピーカーの報告・質疑応答  
涼風町自治会(芦屋市)  
大手前大学メディア・芸術学部 谷村 要准教授
  - (3) 意見交換
  - (4) その他
5. 主な内容

議事(1) 「参画と協働」に関する審議の進め方について

  - ・実態調査について、従来の質問項目以外に新しい質問項目の検討が必要である。(鳥越会長)  
ご意見があれば3月中に事務局まで意見を提出願いたい。(事務局)

議事(2) ゲストスピーカーの報告・質疑応答

涼風町自治会(芦屋市)  
大手前大学メディア・芸術学部 谷村 要准教授  
ゲストスピーカーからの報告については、別紙参照。

議事(3) 意見交換(質疑応答含む)

  - ・自治会費を取っていないとのことだが、会員と非会員の区別はしているのか。  
会員の優位性として、情報の配信がいち早く受けられることが挙げられる。
  - ・自治会による地域の代表制がどのように担保されているか  
自治会連合会に加入し自治会の意見を伝えている。また、行政に対しても自治会として住民の意見を集約し、要望等を出している。
  - ・社会福祉団体や自治会以外の地域団体と協働しているか。  
子ども会活動で地域の福祉推進委員等と協働している。赤い羽根共同募金を活用しており、子ども会のイベントの際は、募金箱を設置して募金の呼びかけも行っている。福祉の情報も把

握できていないことが多いので、情報提供いただき、一緒に活動していきたい。

- ・涼風町自治会の報告では、人を中心に考えて組織を構築されているので、今の時代に合っている。例えば地域創生、地方創生でも人を全国各地域に張り付けようとしているが、どんな人が地域に必要なかを考える必要がある。

地域おこし協力隊として、自分も地域で活動したいと考える学生もいるが、協力隊経験者からは、一度社会を経験して何らかのノウハウを持ち、地域で何をしたいかという目的を明確に持ってからでなければ、何も得られないと言われている。ある程度、仕事のノウハウを身に付けた状態で、地域に入っていくというのが、必要だと考えている。

一方、学生はその地域の現状を客観的に見ることができ、新たな活動、例えばシーカヤックの体験や宿泊施設の運営などを始め、収益を上げられるようになるなど、地域に活力を与えている状況もあり、知識がなくても可能な面もある。

聖地巡礼の話では、地域にアニメファンが入った結果として、地域の中で新しい横の繋がりができているところもある。例えば、沼津市の NPO 法人の活動員の 40 人のうち 18 人がアニメファンだったり、移住者が増えているという状況も見られる。

- ・会費 0 円、会議をしないなど、住民の負担を減らすことは、多様化時代の中で、人に合わせていくやり方だと感じた。一方、新しいやり方への反発などがあるか。

最初は受け入れられていない印象を受けたが、自治連の中でも自治会離れが課題になっており、変化していこうとする動きが出てきたので、逆にそこにアプローチできたと考えている。自治連も新たな意見を取り入れる流れになってきている。

- ・今後、役員が固定化する懸念があるが、対応を考えているか。

できるだけ自治会運営をシステムティックにし、属人性を排除しようと考えている。誰が会長になっても変わらない自治会というのを目指して取り組んでいる。

- ・新しい委員を取り込む際に工夫していることがあるか。

委員に立候補する人には事前にアプローチしている。また、立候補した人が伸び伸び活動できる環境をつくるため、責任は自治会で取るので好きなように活動してもらうことをベースにしている。

- ・自治会に入りやすい反面、辞めやすくもあり、辞めたいと考える人たちを引き留める方法を考えているか。

自治会に入りやすい反面、辞めやすいのは、役員も同じで、フレキシブルで気軽な方が、逆に精神的負担が少ないと考えている。委員等の立候補がなければ、自治会を休会するくらいの気持ちでやっている。自発的にやりたいという人がいない限りは、そこまで無理してやる必要もないということを、自治会設立の際に皆さんに説明して、概ね同意いただいている。

- ・グローバルの視点で考えると、発信力を持つ地域が非常に強くなっていくが、仮想空間と現実空間との交錯は主に都市部で展開されており、地方で可能な地域というのは限られてくる。兵庫県は多様な地域を持っており、県全体の議論にどこまで取り入れられるかは課題がある。
- ・現実が法律により制限されている一方、仮想空間はほとんどなく、現実と仮想と異なる次元が交錯する中で、法による制限がどれだけ可能か、またその制限が必要かは議論するところがある。
- ・自分自身の地域や仕事で地域活動の活性化に関わっている経験から、こういう風にできたら良いとイメージしていたものを実現されており、非常に良い取組であると感じた。
- ・当部会では参画と協働の更なる展開ということで議論を進めているが、条例が施行されてから15年が経過し、社会状況の大きな変化などにより、参画と協働そのものを考え直す必要がある。
- ・涼風町自治会は白地図上で綺麗に新たに一つの社会ができたという特殊なケースで、兵庫県の他の地域には見られない。何故上手くいったのかを考えると、本質がボランティア活動だからであって、従来の自治会がボランティア活動を行うのではなく、ボランティア活動が自治会の形を取っているからである。
- ・我々はボランティアと自治会は別物で対立する形で捉えていたが、地域の代表制が必要だったからボランティア活動が自治会の姿を取ることがあり得るということが分かった。今後、こういった現象が兵庫県下で起こり得ることを見据え、参画と協働の更なる展開の議論の際は、これまでの対立という我々の発想を変えて、ボランティアがここまで来ているということで更なる展開と考えることができる。
- ・地域の膨らみを持たせる「ふるさとづくり」という言葉はバーチャルだと気づいた。「ふるさとを創る」というのは現実でなくバーチャルと考えると、地域の膨らみをつくる手段として活用を検討することができる。
- ・参画と協働の更なる展開の議論につなげると、涼風町自治会では具体的な形の受益者負担でなくとも、ギブアンドテイクをお互いが認め合う仕組みがどうしたらできるのかという話であり、谷村准教授の報告もバーチャルとフィジカルがどのような形で関わり合うのかコミットメントの仕方の話であった。我々が今後考えるべき、「責任」や「新しい地域力」に議論をつなげていけないかと考えている。

#### 議事（４）その他（事務局からの伝達事項）

- ・次回（第２回県民生活部会）は、平成31年5月または6月に開催予定

## 涼風町自治会（芦屋市）の報告

- ・涼風町自治会の設立は平成 27 年（設立から 3 年 8 ヶ月）南芦屋浜の人工島には現在約 5,700 人が居住。涼風町は当人工島の最南端にある開発途中の新興住宅地（約 600 人 350 世帯）であり、将来的には、およそ 700 世帯になる予定。
- ・当初涼風町に自治会はなく、涼風町の声が行政に届いていないと実感し、自治会の必要性を強く認識、自治会の設立を呼びかけた。自治会の設立準備として、島内の他の自治会長をはじめ、様々な人や機関に相談し、自治会のあり方から検討を始めた。また、町内住民の自治会への意識を把握する目的でアンケート調査を実施するとともに、自治会設立への協力者を募集し集まった 14 名で準備委員会を立ち上げた。
- ・アンケートの結果では、会費や参加が負担になるという自治会へのマイナスの意見や不安など、自治会は不要との意見が多く出てきた。これらの意見を取り入れた自治会運営の道を模索し、1 年かけて「自治会費 0 円」「活動は任意、活動したい人が手を上げる立候補制」「回覧板はメールやアプリを活用」（無料サイト：らくらく連絡網）を運営の柱として打ち立てた。自治会加入方法は加入申込書を紙ベースで配付、提出してもらうのと同時に、web サイト経由の申込みも可能にした。また、役員も就労者が多いため、会議を減らし、常に情報を共有できるインターネットの掲示板サービスを使用している。
- ・涼風町自治会では役員の負担を軽減するために、役員は会長、幹事、会計の 3 役しか置いていない。役員のほか、理事会を構成する活動委員については、例えば子ども会を作りたい人が子ども会を作り、子ども会のことだけを行う委員会委員として募集をした（現在、広報委員、美化委員など 10 委員会、延べ 45 人体制で活動。）委員会方式にすることで「興味があることなら時間を使える」ということで手を上げやすかったのではないかと考えている。委員会を立ち上げる時、自治会に要望や意見のある住民に、「発起人として、一緒に私たちと委員会を立ち上げませんか」と逆に提案すると、引き受けていただける。
- ・「自治会費 0 円」のため、資金のないところからのスタートであった。子ども会などは最初は手作りで行っていたが、市の助成金を得て活動してみようということで美化委員を立ち上げ美化活動を始めた。様々な助成金に合わせた活動をし、その助成金を原資に別の活動を行うようになった。今年は、年間 80 万円程度助成金を活用している。
- ・昨年の台風 21 号では高潮浸水被害があり、想定外のことで大きな混乱が起こった。避難所は遠く離れたところにしかなく、その移動経路には水が溜まっていた。市からは避難所への避難の呼びかけがあったが、移動時の二次被害が想定されたため、自治会の判断で、垂直避難を呼びかけた。また、自治会は住民から情報を収集し、アプリの連絡網配信を利用して、様々な情報を配信した。住民からの支援の申し出や助けを求める発信もあり、メールやアプリを活用した涼風町自治会運営の機能が生かされた。災害後には、自治会への加入世帯が一気に 30 世帯近く増えた。
- ・今回のことで、コミュニティが自分や町を守る防災に、防犯に、心の支えにもなるということを実感した。今後、さらに自治会に興味を持ってもらう人を増やし、参加してもらうことで、一人一人の負担を減らすとともに、コミュニティを広げていきたい。

大手前大学メディア・芸術学部 谷村 要准教授の報告

- ・専門は社会学、インターネットの普及により仮想空間が現実にも与える影響をテーマに研究している。また、京都府京丹後市の過疎地域で学生と一緒に活動している。サブカルチャーと地域再生、地方再生は一見関連がないと思われるが、意外に結びついている。
- ・society5.0に関して、梅棹忠夫氏（民族学、比較文明学者）が提唱した、今から60年近く前の情報化社会のイメージの延長線上にあるものだと見ている。society5.0は、IoTやAIといった新たな技術により現実空間と仮想空間の融合が進み、その結果、より効率化された情報社会が構築されると理解している。
- ・これまでの情報化社会は仮想空間と現実空間を線引きしたイメージで語られているのに対し、society5.0は両者が融合して、特にサイバー空間上のビッグデータ、オープンデータを利活用していくというイメージで語られているが、このような仮想空間と現実空間が融合とまではいかないまでも、混合し合った状況は、既に出現していることを実感している。
- ・スマートフォンはPC、デジタルカメラ、コミュニケーションを融合したツールであり、既存の機械とメディアを統合（コンバージェンス）したメディアとして理解することができる。昔は複数の機械を使用し、メディアとして情報発信するという工程がスマホ1台で可能になった。その結果、仮想空間（サイバー空間）と実態を持った現実空間（フィジカル空間）の情報のやりとりがつかないほど異常に早いスピードで動くことになった。涼風町自治会では仮想から現実へ情報を配信することによって、現実をより良くするために上手く利用されている。
- ・逆に近年、現実と仮想の優先順位付けを混同する「歩きスマホ」や「ながらスマホ」が大きな問題となっている。例えば「ポケモンGO」というゲームでは、仮想空間を舞台とするゲームの中の設定と現実の位置情報が紐付けられ、実際に存在する場所に全く違う意味が付与された結果、その場所に人が集まってくるという現象がある。その現象がある種の社会問題となって表面化した。今後、どのように現実空間と仮想空間の折り合いを付けていくかということが、一つの課題になっている。
- ・この問題に関して私が中心的に研究を続けているテーマが、アニメの舞台になった場所をファンが巡るといふ、アニメの聖地巡礼という現象である。今はアニメツーリズム協会が設立され、アニメ聖地88箇所というものを作り、観光客を誘致する動きなども出てきた。アニメの聖地巡礼の効果で、観光客が20倍くらいになったというデータもある。
- ・観光客誘致の成功という経済効果に焦点が当てられがちだが、地域の外からやってきたアニメファンが、地域の中に入って地域活動に参加したり、ボランティア活動を行ったり、観光に訪れるファンへの対応という課題について地元商店が意識を共有することにより、地域のつながりが活性化されるというような、副次的な側面も現れている。仮想空間という「実際にはない、あやふやでよく分からないもの」が結果的に現実のつながりを強めていることが非常に興味深い。
- ・梅棹忠夫氏は動物発生学とのアナロジー（類推）で、社会の段階的発展を捉え、今の情報社会を提案したが、動物が未分化受精卵の段階から徐々に成体になっていく過程という流れが、まさに人類社会が辿っている過程と似ている。未分化受精卵から内胚葉が分化していき、その後中胚葉、外胚葉と分化していく流れが、社会の中で発展していく主要な産業、人間が従事する

業態と類似しているとしている。内胚葉は消化器官、食物を摂取する機能が発達し、中胚葉は筋肉や骨格が形成されていく、そして外胚葉で脳や神経系、表皮が発達していくのだが、この流れが人間社会の発達においても見られるとイメージしている。

- ・この理論を前提に考えれば、諸機能の確立を終えた有機体である生物が、外界との間で自己と外界を区別するという状況になる。その中で境界が明確化されてくると、外界からの刺激にどう対応していくのかというのが一つ問題になってくる。
- ・我々の社会は、情報ネットワークが張り巡らされることにより仮想空間を作り出したが、この中で現実と仮想の境界を区別し、仮想が現実には及ぼす影響をどう受容していくかが、現在の社会が突きつけられている課題である。society5.0は「便利になる」「より効率化される」イメージだが、仮想が現実には様々な形で影響を与える中で、どのようにそれを利活用するかが問題化されている。
- ・仮想空間にあるものを活用している例として、千葉市がやっている「千葉レポ」がある。「千葉レポ」はスマホのアプリを活用して、公園の遊具の破損等、ささやかな情報を市民がアプリを通じ情報共有することで、地域課題の解決を図るものである。自治体が把握しにくい情報を把握しやすくする役目も持っている。
- ・自分の住んでいる地域以外に入り、そこで行われる地域活動に関与していく事例というのは、アニメの聖地巡礼だけに留まらず、様々に見られる。総務省が関係人口という形で、いわゆる定住人口や交流人口といったものとは異なる概念で表現しており、地域と多様に関わる人々に地域外の人々も含めるとということが想定されつつある。地域住民だけでなく、地域外の方の関与を、インターネットなど様々な媒体を活用して増やすことが着目されている。
- ・アニメの聖地巡礼では、自分の住んでいる地域では、地域活動を熱心に行っていないと思われる人が、何故か自分の住んでいない地域に来て熱心にボランティア活動をして状況が見られる。活動のモチベーションの解明と同時に意欲を高めていく方策を考えるのも課題である。